

特集 立教女学院と滝乃川学園 前編 (文中敬称略)

(社福) 滝乃川学園 石井亮一・筆子記念館 館長 米川 寛

立教女学院(以後女学校と記す)と滝乃川学園(以後学園と記す)は強いつながりがあり、特に学園創立者石井亮一、筆子夫妻存命の戦前においては共に助け合い、歩んできた。私は、二〇一一年(平成二三)年に学園が発行した『滝乃川学園百二十年史』(大空社・津曲裕次監修)の発行責任者として学園の歴史研究に足を踏み入れた。津曲先生(筑波大学名誉教授)の助手として編集作業を行っていた時に、津曲先生が「立教女学院は学園の父、立教女学院は母みたいなものだ」と仰っていたことを思い出す。亮一が日本聖公会の父であるウイリアムズ主教と出会い、キリスト者として導かれ、生涯の友を得た立教女学院は父親の役目を果たし、亮一が生涯をかける事業の源を母親である女学院で萌芽させた。それでは、主な出来事を中心に歴史を紐解くとしてしよう。

□出会いから学園前史

女学校と学園の出会いは、亮一が立教大学を卒業し、女学校教頭になった

ことが有名であるが、妻の筆子はそれより十年以上早く女学校と出会っている。長崎大村藩士の長女として一八六一(文久元)年に生まれた筆子は、明治維新後の一八七二(明治五)年、大村から上京し、日本初の官立女学校「東京女学校」に入学した。

東京女学校が一八七七(明治一〇)年に閉校になると、ウイリアム・ホイットニーの英語・バイブル塾へ通うウイリアムの娘クララ(勝海舟三男梅太郎夫人)の日記を見ると、この塾を介してウイリアムズ主教、女学校の初代校長ブランシェー等と交流している。また、筆子自身も一八八〇(明治一三)年に第二代校長ピットマンに誘われ、女学校へ赴き、「舎監の小宮珠子様とお会いした。終生のお付き合いの始まりであった」と記している。

その後筆子は、日本女性として初めてヨーロッパ留学をする。帰国後許婚であった旧大村藩家老の次男で官僚の小鹿島果と結婚し、華族女学校のフランス語の教師に就任する。果との間に長女が誕生するが、知的障害児であった。筆子はそれを機に、一八八六(明治一九)年娘と共にウイリアムズ主教のもとで洗礼を受ける。筆子のクリスチャンネームの名付け親はブランシェーで、娘の名付け親は華族女学校の同僚である津田梅子であった。筆子は後に「ブランシェー長老は己を教えるの道に導き給ひし御方」と記している。



その後の日本聖公会を背負っていく青年たちを紹介しておく。(一)内は後の職位である。後列左から、杉浦貞次郎(立教大学学長)、名出保太郎(大

さて、亮一であるが、一八六七(慶應三)年に佐賀鍋島藩士の六男として生まれ、一八八四(明治一七)年に立教大学に入学する。大学でウイリアムズ主教の教えを受け、一八八七(明治二〇)年に聖アンデレ教会にて洗礼を受ける。そして終生学園を支えてくれた友たちと出会う。この写真は、当時欧米偏重の学則であった大学を、日本人向けにしたいと、大学改革に取り組んだ八人の写真で、『立教女学院八十五年史』では「学制改革主唱の学生」と紹介されている。

博愛社の小橋勝之助は重い病に罹り、女学校教師の林歌子に助けを求めた。林はそれに応え大阪に赴き、小橋亡き後博愛社を支えた。当時の女学校は孤女学院を始め様々な事業に貢献したのである。

□知的障害児教育への道

孤女学院は船出し、様々な人達の助けを得ながら徐々に女学校として歩みを進めた。震災孤女の中に、他の生徒と同様に教えても成果の上がらないA子という女子がいた。当時は「白痴」と呼ばれていた「知的障害児」であった。知的障害児に対する福祉、教育の制度等なかった時代であるが、亮一は自らA子の教育を試みる。その背景には、聖書の言葉「いと小さき者の一人に為したるは、すなわち我に為したるなり」(マタイ伝)の教えがあったと後年筆子が記している。実際にA子と

後年筆子が記している。実際にA子と相対してみると、「その子にあった教育を施せば、その子なりに発達することが分かってきた。亮一は、今まで顧みられなかった知的障害児にも、教育が必要であるとの思いを強く抱き、試行錯誤しながら「知的障害児教育」を始めた。

一方、筆子は三人の娘に恵まれるが、次女は生後半年ほどで夭逝、三女は長女と同じく知的障害児であった。当時の筆子は、華族女学校のフランス語教

阪教区初代主教)、石井亮一(滝乃川学園学園長)、早川喜四郎(平安女学校校長)、前列左から、小林彦五郎(立教女学校校長、学園理事長)、皆川晃雄(東京教区長老)、岩佐琢藏(立教女学校教頭、立教大学教授)、杉浦義道(東京教区長老、学園理事) この内、名出、皆川、杉浦義道は隣接していた聖三一神学校の神学生で、当時校舎は共有で必要な授業は共に受けていた。亮一は、一八九〇(明治二三)年に卒業し、女学校の教頭となるのだが、これには小宮珠子等女学校教員の強い願いがあった。女学校も立教大学と同じ欧米偏重の悩みがあり、大学改革の中心人物であった亮一を招き、同様の改革してもらいたいとの願いである。亮一も、男尊女卑の時代ではあったが、女性も学を修め男性の従者ではなく、一人の人間として歩むべきだとの思いを持っており、女子教育者への道は願ってもないものであった。当初は日本人初の校長にとの願いであったが、亮一は目立つことを嫌がり教頭となり、校長には聖公会の教育者清水友輔を招聘した。(清水は同年、筆子、津田梅子と共に博愛教会(現・聖愛教会)を設立している)

□孤女学院設立へ

東京教育院発足直後、濃尾大震災(岐阜県、愛知県)が起きる。マグニチュード八・四、死者七〇〇〇余人、親を亡くした孤児(親を亡くした児童)が約六〇〇人と多大な被害に見舞われる。亮一は、同じキリスト者である石井十次(岡山孤児院)、小橋勝之助(聖公会信徒・大阪博愛社)等と共に孤児の救済に奔走するが、東京教育院では規模が小さく引き受けに限界があった。亮一は既に遺産を相続していたので、それを基に新たな施設の設定を決断する。それが滝乃川学園の前身「孤女学院」(北豊島郡滝野川村・現北区滝野川)である。亮一は女子教育者であったため、女子を引き取り、孤児院ではなく孤女(親を亡くした女子)の為の寄宿舎付きの「女学校」を設立したのである。

弱冠二十四歳の亮一は、女学校の教頭を辞し、引き受けた二〇余名の孤女たちと新たな道を歩み始めた。その困難な事業を助けてくれたのは、聖公会信徒、女学校の関係者達であった。女学校からは教員を始め、女子学生もはせ参じ黎明期を支えてくれた。

女学校は亮一が辞した後には岩佐琢藏を教頭に招聘し、東京教育院も岩佐が引き継いだ。一八九四(明治二七)年閉鎖となり、女子は孤女学院へ、男子は博愛社へと引き継がれた。また、

師、付属幼稚園の主事、聖公会のミッシェンスクール「静修女学校」の校長と、日本女性の先頭を走る女子教育者であった。しかし、私生活では一八九二(明治二五)年に夫果が病気で死去し、障害児を抱えた今というシングルマザーとなったのである。

亮一は女学校の第三代設立者であるマキム主教の仲介で、静修女学校の講師を勤めていた。同時期に知的障害児教育を始めた亮一は、筆子に手を差し伸べ障害のある娘達を預かり教育に当たった。

当時の孤女学院の運営費は、一般人達や篤志家、聖公会関係者の寄付が主なもので不安定な経営となっていた。そこで、筆子は小宮珠子等と共に華族女学校で培った人脈にも助力を請い「慈善市」(福祉バザー)等を催し、財政面で亮一を支援した。

□孤女学院から滝乃川学園へ、そして結婚へ

亮一は、本格的に知的障害児教育を始める決意を固め、一八九六(明治二九)年知的障害児教育に実績のあるアメリカへ渡る。現地で視察、研究を重ね、帰国後一八九七(明治三〇)年に、孤女学院を知的障害児教育施設「滝乃川学園」に改め、知的障害児生徒の募集を始める。知的障害児の為の「特殊教育部」、障害のない孤女の「保母養

成部」を設置し、日本初の「知的障害児学校」として歩み始めた。ちなみに特殊教育部の第一期生は、A子と、筆子の長女である(三女は既に死去) 一八九八(明治三一)年、亮一は二度目の渡米をする。今回の目的は視察研究の他に「アメリカ聖公会総会」にマキム主教と共に出席することも含まれていた。同年筆子も、津田梅子と共に「万国婦人倶楽部」大会に出席するために日本政府よりアメリカに派遣される。亮一と筆子は現地で落ち合い、聖公会総会に出席し、既に帰国していたブランシェーの教会へ二人で赴き、結婚の約束をする。帰国後筆子は結婚に向け、華族女学校を退職し、前後して退職した津田梅子に、静修女学校の土地、建物、生徒を委ねた。これが後に「津田塾大学」となっていく。 一九〇三(明治三六)年、亮一と筆子は、マキム主教司式、津田梅子立ち合いのもと、聖三一教会にて結婚する。亮一三十六歳、筆子四十二歳であった。 一九〇二(明治三五)年に、小林彦五郎が女学校の第七代校長に就任したこともあり、亮一は女学校に復職した。毎週一日出勤し、生徒の心理判定、教育学の講義を受け持っていた。当時の小宮珠子の日記(女学校資料室所蔵)には、亮一の出勤のことや、学園で採れた野菜を何度となく小宮に贈ったこと、小宮が学園に寄附をしたこと等学園との交流が記されている。(後編へ続く)